



町民文芸

只見短歌会

九月詠草

大塚栄一

指導

我が地域祭りの神輿や子等減るも老いも若きも集ひ賑はふ

関谷登美子

手の先の胡瓜の花を飛び移る丸き蜂ありいと頼もしき

小倉キミ子

夕暮るる遅夏の日の穏やかに早生の稲穂は黄金色なす

馬場 八智

庭の花さりげなく活け口数の少なき夫は退院待ちし

古川 英子

数十年欠かさず日記をつけし母父逝きし後空白目立つ

新国由紀子

目の手術終へ来し庭に甲高く鶉鳴きぬ子の初彼岸

五十嵐夏美

氏神の祭りの幟眺めつつ喪中にあれば遠く手合す

渡部ゆき子

膝庇ひ摺まり立ちする友人の力が我がの肩にかかるも

目黒 富子

刈り取りの終りし田にはいち早く落穂啄む鴉群がる

渡部ヨリ子

見てくれと言はむばかりに背伸びして爪研ぐ猫に柱は白し

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十月例会

目黒十一

指導

峠越え早高々と十三夜

修一

喧騒の巷にも見え星月夜

秋の田や戌辰の無念思わるる
朝採りの野菜を添えて芋の月

信

滝の霧浴びて紅葉の人となり

一穂

秋の月食声を密めて仰ぎけり

西瓜切る音希望へと続く道
草刈るは無心の境地今朝の秋

リウコ

皆既月食素足で見上げる闇の空

敦子

松坂峠くんだりし星の夕紅葉

己れ立つ富士の地肌や霧晴るる
秋色や逃げる幼子早きこと

都

遠音に聞く「鶴の巣籠」秋の月

吉児

赤錆の鉄路や背高泡立草

カナヘビの眼傾げる豆筵
秋澄むやマラソン選手迂曲る

礼

新築の祝いの破魔矢薄紅葉

邦男

稲架作る人影遠き声遠き

栗虫の栗食む声の仏間より
近づけば声を発する案山子かな

順子